何千枚でも貼り付ける積りなのか、新吉は專心に恐ろしくまじめに、火にかはかしたり、函を雪の中へ放つたり、非常に忙しそうにやり出した。

尾上は鐵筆で謄寫紙に何かを書いてゐた。

冬の夜は次第に更けて行つた

十二時も一時も過ぎた頃、やつと新吉は貼毛を動かす手を休めて、ねどこに這入つた。

村の狂人が忽び入つて、不意に顏面や頭や胸へ玄翁を打ち下ろすかも知れない。

あの狂人の目が新吉は物凄くて不安でならなかつた。

五分經つた、其の間新吉はウトウトしてゐたかも知れない。

『火事だ！　火事だ！』

外で風のように叫ぶ聲が聞えた。

『尾上君、尾上君』

誰かゞ呼んでゐる。

吊りランプを持つて尾上は、教室へ行つたりした。